

I 「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい」：13。

1. 「互いに」。どちらか片方ではない。主が生み出される交わりは、相互のもの、片方の我慢での表面的な交わりではない。

2. 「忍び合い」の原語：辛抱する、認める、受け入れるの意。同じ言語の箇所：「愛をもって互いに忍び合い」（エペソ4：2）。これは、愛をもって真実を語る事をせず、ただ肉の我慢をし忍び、心で恨みを増す事ではない。愛をもって互いに正直に語り合い、かつ、お互い完全ではなく、欠点がある事を認め受け入れ合い忍び合う。

3. 「だれかがほかの人に不満（原語：苦情、不平）を抱くことがあっても」。神は教会（私達）の現実を良くご存知の方。教会は完全な人々の交わりではない。私達は皆、まだ不完全であり、罪、弱さ、欠点があり、不完全な私達の集まりが教会である。主の御姿に変えられつつあるまだ途上の者達の集まりである事を決して忘れないようにしたい！互いに要求のハードルを下げる事が人間関係には必要である。私達は皆、互いに不満を持つ事がある。もし、私達に、罪、欠点、不満が一切ないなら、聖書に「互いに赦し合いなさい」という御言葉はいらぬし、記されていないだろう。しかし、この地上では、私達は皆お互いに罪、弱さ、欠点があるため、いらぬさせられたり、いらぬしたり、とげとげしくなったり、とげとげしくされたりする。それゆえに、そういうことがあっても→

4. 「互いに赦し合いなさい（原語：赦し続け合いなさい）」と語られる。

## II 赦しの実践。

1. 「互いに赦し続け合いなさい」。赦しは一回だけではない。この地上での交わりは、お互い励まし合い、ある時はお詫びし、謝り、お互いに赦し合い続けながら成長する教会の交わり。

2. 「互いに」。互いに自分の分、自分が悪かった点を謝る。そして赦し合う。主の愛をいただきつつ。

3. 赦し合う事は、両方のそれぞれの分があり、相手の分を支配したり強制したりしてはならない。「赦すのが当然でしょ」と相手に強制してはならない。赦す事は、時間とエネルギーがいる大変な事。「赦すべき」と頭でわかっている、気持ちも追い付いて行かない段階がある。その気持ちを受け留める、認める過程、プロセスも大切である。自分の気持ちも相手の気持ちも。神の前に、ありのままを打ち明けよう。「あなたは、私のすべての罪を赦して下さいました。しかし、私は、まだ相手の人を心から赦すことが出来ません。こんな私を憐れんで下さい」と。神は、そのところを通っている私達を理解し受け止めて下さる。

4. 私達は、自分が相手に悪い事をした時、心から謝りたい。祈りたい。聖霊様は助けてください。但し、それを相手が受け入れてくれて和解が成立するには時間がかかる事がある。和解は、謝る側の心と赦す側の心が一つとなる時、成立するからである。神が私達に求められる事は、誠実に相手に謝る事である。あせって相手に自分を赦させる事ではない。「こんなに謝って

いるのに、どうして赦してくれないのか」と責めてはならない。それは私達の方、責任ではない。ローマ12：18に「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい」とある。これは、とても大切な真理を教えている。「自分に関する限り」とある。これは、相手の態度や結果を問題にするのではなく、「自分に関する限り」つまり、あなたの側では主体的に自分の責任（真実な謝罪をする）を果たしなさい。相手が赦して下さるかは、神に委ねる事が大切。

5. 赦しとは、相手を赦した後、かりに相手のした悪を思い出したとしても責めない事。忘れようと頑張ると余計に思い出される事がある。愛は「人のした悪を思わず」（Ⅰコリ13：5）。「思わず」と同じ原語が、Ⅱコリント5：19では、こう記されている。「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことは私たちにゆだねられたのです」。つまり、赦すとは、責めない事である。神は、私達が正直に告白した罪を完全に赦し、もう二度と責められない。

Ⅲ 互いに赦し合う為の素晴らしい原動力、愛、恵み。「主があなたがたを赦して下さったように」。「互いに赦し合う」前に常に主の愛、赦しが先行している事を覚えて心から感謝したい。主の十字架の御業が成就するまでの主の苦悩、苦しみ、痛み、重みを深く覚えたい。感謝したい。主を信じる前の私達の罪も主を信じて今日までの罪も、主は赦し続けておられる事を深く覚え、心から感謝したい。もし、主の赦しがなければ、今日の私達は、存在しない。とっくに滅んでいる。しかし、今生かされている。それは、奇蹟的な主の赦しの恵み。赦すという事は、ある意味では、救い主イエスの苦難の道を経験する過程とも言える。私達が、ある人を赦せない苦しみを通る時、自分の力で頑張る事を止め、ゆっくり、じっくり主を思い、信仰の目で主を見つめたい。計り知れないへりくだりでクリスマスにお生まれになった主。私達の罪の為に神から呪われた者としての十字架の死、神との断絶の十字架を前に、深くもだえはじめられた主、悲しみのあまり死ぬほどですと打ち明けられた主、愛する者から裏切られ、人々からつばきをかけられ、ののしられ、ばかにされ、十字架で手足に釘が打ち付けられ極限の苦しみを私達の罪の為に味わわれた主。現在、天で弱い私達の為にとりなし、地上では私達と共にいて私達を愛し理解して下さる主。祈り：主の赦しの深さを思い感謝し、赦し合う者として下さい。